



Medical Satellite Yaesu Clinic News

Vol.8(bi-Monthly) Dec, 2003

1. 第2回講演会を開催いたしました
2. 頭部MRI検査 急性期脳梗塞について
3. 年末年始休診のお知らせ
4. 画像診断報告書分析 子宮筋腫
5. MRにおける肝特異性造影剤とは・・・

発行所：メディカルサテライト八重洲クリニック



0120-786-055

東京都中央区八重洲1-5-9 八重洲アメレックスビル9F

TEL03-3516-8020 FAX03-3516-8022

「第2回講演会を開催いたしました。」

去る10月18日(土)、帝京大学医学部放射線科助教授である、大場先生を講師にむかえ、『脳・脊椎の疾患に関して、MRI・CT診断ポイントを概説』と題して講演会を開催いたしました。

「脳・脊椎の疾患に関して、MRI・CT診断ポイントを概説」 講師：大場 洋 先生



- ・ 脳梗塞，脳出血
- ・ 脳腫瘍
- ・ 痴呆を中心とした変性疾患
- ・ 脱髄疾患・頸椎症，ヘルニア，頸椎硬膜外血腫、
頸椎の炎症などの脊椎疾患



当日はお忙しい中、多くの先生方にご参加いただきました。心から厚く御礼申し上げます。
まず、当クリニック診療放射線技師より、MRIによる急性期脳梗塞の撮影法についてご説明をさせていただきました。

大場先生には、頭部を中心に、様々な症例についてご紹介、ご解説いただき、また、講演終了後の質疑応答も多岐にわたり、時間を延長しての大変充実した内容となりました。

今後も定期的に講演会を企画し、検査をご依頼くださる先生方との情報交換や、ご意見を頂戴する場として発展させていく所存です。

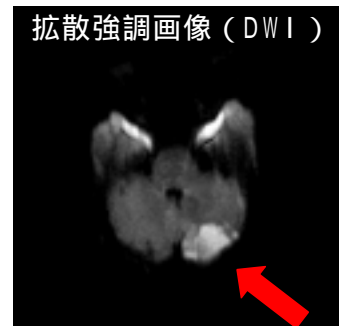
(医療連携担当：大塚 龍哉)

「頭部MRI検査 急性期脳梗塞について」

めまい等の症状を主治医の先生に訴えられた患者様が、当院でMRI検査を受けられた結果、急性期脳梗塞が発見されるケースが、最近しばしば見受けられます。急性期脳梗塞の早期発見に非常に有効な、MRIの拡散強調画像(diffusion weighted image)を用いての診断が、このような早期発見を可能にしております。しかも、比較的短時間で行える検査です。急性期脳梗塞と診断した場合は、依頼元的主治医に、即座にご報告したうえで、ご指示によっては救急車やタクシーを使って、ご指定の医療機関に搬送する措置をとらせていただいております。

当院では、急性期脳梗塞を疑う患者様の撮影(MRIによる拡散強調画像)を当日に受け入れる体制を整えております。急性期脳梗塞が疑われる場合は、検査ご予約の際に、その旨お伝えいただければ、当日検査としてお受けいたしますので、遠慮なくご依頼ください。

(院長：茅野 文利)



拡散強調画像(DWI)

「年末年始 休診のお知らせ」

年末年始の休診は、以下の通りです。ご迷惑をお掛け致しますが、宜しくお願い致します。

12月28日(日曜)～1月4日(日曜)

1月5日(月)からは、通常通り診療を行います。

平日9:00～21:00

土・日・祝日10:00～17:00

(院長：茅野 文利)

<診療時間：月曜～金曜日：午前9時～午後9時 土日祝日：午前10時～午後5時、造影日：月曜～土曜日>

「画像診断報告書分析 子宮筋腫 leiomyoma」

子宮筋腫とは子宮筋層から発生する平滑筋腫です。良性腫瘍で極めて高頻度にみられます。通常は多発性で、圧排性に増殖します。発生する部位によって筋層内 intramural や漿膜下 subserosal、粘膜下（内膜下）submucosal に分類されます。大きさや部位、個数により子宮は様々に腫大、変形します。粘膜下筋腫は不妊の原因の一つとなり、時に経頸管的に腔内に発育、突出します（筋腫分娩）。漿膜下筋腫は有茎性に発育し、卵巣の充実性腫瘍と類似する場合があります。肉眼的には白色充実性の境界明瞭な硬い腫瘤で、内部にしばしば変性を伴い、時に石灰化がみられます。組織学的には平滑筋由来の紡錘形細胞が束状に増殖します。

画像検査としては第一に超音波検査で、次にMRIです。MRIでは骨格筋とほぼ等信号を示します。T1強調画像（図1）では周囲の子宮と同程度の信号強度で、T2強調画像（図2）では子宮筋層と比べ低信号を示します（）。ただし浮腫などの変性によりT2強調画像で等信号から高信号となり、病変が斑模様を呈することもあります（）。また細胞成分の多い富細胞平滑筋腫 cellular myoma でも高信号を示します。腫瘤の辺縁、周囲には筋腫を栄養する血管や偽皮膜がみられ、子宮腺筋症との鑑別の一つとなります。悪性の平滑筋肉腫 leiomyosarcoma は稀な疾患で、MRIでは変性や細胞成分の多い筋腫と類似の所見を呈し、鑑別は時に困難です。ただし周囲への浸潤や転移があれば肉腫を考えます。筋腫は通常、閉経後、退縮しますので、更年期や閉経後に急速に増大や出現した筋腫は肉腫の可能性ががあります。子宮筋腫の診断には造影MRIは通常必要ありません。（放射線科専門医：松岡 勇二郎）

図1：骨盤軸位断 T1 強調 MRI

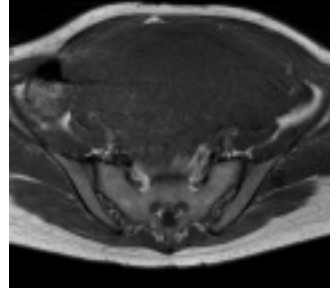
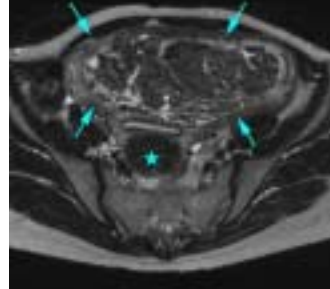


図2：骨盤軸位断 T2 強調 MRI



「MRにおける肝特異性造影剤とは・・・」

通常、MR検査で使用される造影剤はガドリニウムを主成分としています。この造影剤はCTで用いられるヨード系の造影剤と同様に細胞外液に分布し、特定の臓器に対する特異性を持つことはありません。

しかし、近年肝臓への特異性を持つMR用造影剤が開発され、MRの肝臓検査に新たな選択を可能としました。この造影剤は超常磁性酸化鉄製剤であり、主として肝臓の細網内皮系細胞であるクッパー細胞に取り込まれることにより、クッパー細胞を有さない肝の悪性腫瘍とのコントラストを向上させ、悪性腫瘍の検出能を向上させます。撮影はT2強調画像を中心に行なわれます。

造影CTと比較した超常磁性酸化鉄製剤を用いたMR検査の診断能は、造影CT検査よりも診断に貢献したとされる報告（村上卓道ほか：日磁医誌19(2), 1999）もあり、肝臓における病巣検出能は大変優れているといえます。

当院でも超常磁性酸化鉄製剤である“リゾピスト”（シェーリング）を使用しています。

右上図では転移性肝腫瘍の臨床画像を示します（赤矢印：転移性肝腫瘍、白矢印：海綿状血管腫）。図1は造影前のT2強調画像、図2はリゾピスト静注10分後のT2強調画像です。クッパー細胞に造影剤が取り込まれることで正常肝細胞の信号強度が低下し、腫瘍部分のコントラストが相対的に上昇し、病巣の検出能が向上しているのがわかります。（診療放射線技師 奥秋知幸）

